

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年6月8日現在

機関番号：37106

研究種目：若手研究(B)

研究期間：平成21年度～平成24年度

課題番号：21730651

研究課題名（和文）中日国交断絶期の日本語習得者に関する研究

研究課題名（英文）A Study on Japanese learners in the period of severance of diplomatic relations between China and Japan

研究代表者

山本 経天 (YAMAMOTO KEITEN)

日本経済大学・経済学部・准教授

研究者番号：40410641

研究成果の概要（和文）：本研究は、まず、中日国交回復前の日本語教育機関の全体状況を解明した。次は、人物史研究として戦前の日本留学生徐祖正、旧植民地台湾出身者陳信徳、日本人居留民岡崎兼吉、新中国を支援した日本共産党教師団を取り上げ、日本語習得者や日本人教師が新中国の日本語教育に果たした役割を明らかにした。

研究成果の概要（英文）：First, this study was to elucidate the whole situation of the Japanese language educational institutions before recovery of China-Japan diplomatic relations. As a person history research, picking up Zuzheng XU, a prewar Japanese student, Xinde CHEN, a man from former colonial Taiwan, Kaneyoshi OKAZAKI, a former Japanese denizen, and a teacher group from the Japan Communist Party that helped new-born China, I clarified the role played by Japanese learners and Japanese teachers in the field of Japanese language education in new China.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2010年度	700,000	210,000	910,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：教育学

科研費の分科・細目：教育史

キーワード：日本語習得者、陳信徳、徐祖正、岡崎兼吉、北京大学、大連日語専科学校

1. 研究開始当初の背景

(1) 本研究の着想に至った経緯：いま、中国の日本語教育は学習者の数においても、教師の数やレベルにおいても世界一と言われており、その規模は英語教育に続いて第二位となっている。このような規模に発展するにはどのような歴史的基盤があったのであろうか。こうしたことに思いを巡らせる時、ある歴史的映像が思い浮かぶ。1972年日中復交の会談である。交渉の場には流暢な日本語を話す中国人通訳がいた。彼らは日本人と変わ

ることない日本語を話し多くの人を驚かせた。周知の通り、建国当初の新中国は「ソ連一辺倒」で、ロシア語教育に力を入れていた。一方、国交がない日本のことばは軽視され、日本語が話せるだけで売国奴と見なされ冷遇される時代でもあった。いったい通訳たちはどこで日本語をマスターしたのであろうか。こうした素朴な疑問が本研究の着想に至った経緯である。

(2) 本研究の位置づけと意義：日本語ができる人が国交回復と同時に突如現れたわけではもちろんない。国交断絶期においても、いつか中日の関係が回復する日を信じ、日の当たらない場所で地道に日本語を学び鍛えていた人々がいたのである。これら日本語習得者の人生は、日本語を学んでいたことで、とりわけ文化大革命という特殊な歴史的環境のもと大きく揺さぶられたはずである。彼らがどのように生き、何を感じ、さらに将来の中日関係をどのように見据えていたのかを、代表的事例を通じて考察する必要がある。彼らの人生は、いわば「秘められた中日交流史の1コマ」である。彼らはまた、今日の日本語教育の基礎を作り上げた。彼らの人生をたどると、戦争と断絶が長かった中日関係の特殊性とともに、両国の交流を広げた日本語教育の流転の歴史が見えてくる。中日友好の基礎の一つである言葉の教育を築いていた彼らの研究は重要な意義を有している。

(3) 本研究における国内・国外の研究動向：本研究のテーマは現代中日関係史研究や中国の日本語教育史研究においてカギとなるにもかかわらず、先行研究を調べてみると残念ながら直接扱ったものはない。

2. 研究の目的

本研究は、中日国交断絶期の日本語習得者がだれにどこで日本語を学び、さらに後の人生では日本語とどのようにかかわっていたのかという人物史研究を軸として、現代中国における日本語教育の歴史的基盤を明らかにすることを目的とするものである。

このような巨大かつ未開拓の研究課題に挑戦するにあたり、明らかにされなければならない課題として、まず、2つの角度から課題の的を絞って研究を行った。

- (1) 日本語高等教育機関史研究である。中日国交回復前の日本語高等教育機関の全体状況を解明した。
- (2) 人物史研究である。代表的な日本語教師、つまり各ルートの日本語習得者や日本人居留民などを取り上げ、日本語を教えた側の全体像を解明した。

具体的には、以下の6つの課題について研究を行った。

- ① 建国初頭の3つの日本語高等教育機関
- ② 1964年に設置した大連日語専科学校
- ③ 戦前の日本に留学し日本語を習得した者—徐祖正
- ④ 旧植民地で生まれ日本語を身に付けた者—陳信徳
- ⑤ 新中国にとどまった日本人居留民—岡崎兼吉
- ⑥ 新中国を支援した日本共産党員—大連日語専科学校の日本人教師団

3. 研究の方法

「研究の目的」に記載した課題の解明のために、次の5つの分析課題を設定した。

(1) 建国初頭の3つの日本語高等教育機関、すなわち、北京大学、東北軍区新聞学校（現在、中国人民解放軍洛陽外国語学院）、北京対外貿易専科学校（現在、対外貿易経済大学）に属する3つの日本語学科について分析を行った。3校の校史研究ではいずれも解明されていないため、方法としては、国内の国立国会図書館など、国外の3大学附属図書館や中国国家図書館および上海図書館などで、当時の日本語教科書や教師たちの著作および大学の募集要項について調査を行った。また、当時の日本語教師や卒業生で、現在中国の日本語教育の権威である孫宗光、谷学謙、顧明耀らのご尽力により、西安交通大学にて「新中国日語教育史研究座談会」を開催し、一部の教師や卒業生へのインタビューを実現した。こうした調査により、各日本語教師の氏名、年齢、性別、出身地、留学前の学歴や経歴、日本語習得の経緯、帰国後の活動や肩書き、日本語研究の業績など基礎的データを収集・作成し、分析できた。

(2) 大連日語専科学校（現在、大連外国語学院）について分析を行った。方法としては、当校の『日本語学院紀事』（2002年）と『日本語学院40年紀事』と『大連外国語学院建校四十年紀事』（いずれも2004年）、当時の日本人教師であった土井大助（『末期戦中派の風来記』2008年11月）、原康彦（『文化大革命に消えた大連日語専科学校物語—40年ぶりの大連訪問記—』2009年11月）が書いた回顧録、卒業生へのインタビューについて分析し、学校の全体的な様子を把握した。さらに、当校付属檔案館に厳格に管理されており、これまで公開されていない日本人教師に関する内部文書65点を入手し、日本人教師団の来華経緯や教育実態などについて分析を行った。

(3) 戦前の日本に留学した徐祖正について分析を行った。徐は新中国最初の日本語・日本文学の教授である。東京高等師範学校卒で、帰国後に北京師範大学を経て北京大学日本語学科の教授となった。こうした経歴を踏まえ、方法としては、『東京高等師範学校一覽』から徐の在学期間、所属学科など詳細な資料の収集、分析を行った。また、『語絲』や『駱駝草』および『創造季刊』など雑誌への寄稿、『日本留学支那人要人録』や『中国現代六百作家小傳』など人名辞書、『魯迅全集』や『周作人の日記』および陶晶孫「藤村雑記—『文学界』のこととその紹介者徐祖正氏のこと—」（『日本への遺書』所収）など徐の友人が徐への記録から、日本語習得の状況、日本語教師になった経緯、日本語の習得が戦後の人生に与えた影響などを分析した。

(4) 旧植民地台湾で生まれた陳信徳について分析を行った。陳は京都帝国大学卒であった。新中国の北京大学日本語学科の教授で、日本語研究の第一人者といわれる。新中国最初の日本語文法解説書『現代日本語実用語法』を著した。『京都帝国大学一覽』から陳の在学期間、所属学科や研究室などの資料を収集し、分析を行った。また、陳の夫人、平林美鶴の回顧録『北京の嵐に生きる』や陳の著書・論文から、留学期間の学習や生活状況、日本語を習得した経緯、帰国後の活動などを分析した。

(5) 新中国に留まった日本人居留民である岡崎兼吉について分析を行った。方法としては、日中友好協会から岡崎のご遺族を見つけ出し、ご遺族から借りた本人の日記について分析を行った。学歴など経歴、北京大学の日本語教師になった経緯、日本語教育や学生の様子、使用した日本語教材などはそれである。

4. 研究成果

「研究の目的」に記した6つの課題を解明し、それぞれについて論文を著した。中日国交回復前に設立された4つの日本語高等教育機関の全体概況を明らかにしたほか、資料的に有力な事例として、留日帰国者を北京大学日本語教師の徐祖正、旧植民地出身者を北京大学日本語教師の陳信徳、日本人居留民を北京大学日本語教師の岡崎兼吉、大連日語専科学校の32名の日本人教師を取り上げ、研究を行うこととした。このような点を解明することによって、留日帰国者や旧植民地台湾出身者という戦前の日本語習得者、日本人居留民、および新中国に派遣された日本共産党系日本語教師団が新中国の日本語教育に果たした役割についての知見を得た。具体的には以下の通りである。

(1) 建国初頭の3つの日本語高等教育機関の実態、とりわけ教師、学生、教材についてできがかり解明した。教師陣から主に3つの特徴が見られる。第1にはほぼ全員が日本で教育を受けたことがある。北京大学の徐祖正、魏敷訓、陳信徳、孫興凡、張京先、劉振瀛、黄啓助、東北軍区新聞学校の汪大捷、孫丹誠、趙福泉、北京対外貿易学院の陳涛、金鋒、張厚聡はそれである。第2に植民地で生まれ、日本語を身につけた者が多い。陳信徳、孫興凡、金鋒、汪大捷はそれである。第3に中国に残留していた日本人が少なくない。今西春秋、岡崎兼吉、藤田恵美らはそれである。学生の特徴として挙げられるのは次の3点である。1点目は新入生の採用は成績より「家庭出身」が重視されたことである。2点目は学生自ら進んで日本語教育機関への進学を選んだわけではなく、国から与えられた「任務」として日本語の学習を始めたことである。3点目は卒業後の進路は自ら選ぶのではなく決められた職場に赴いたことである。教材については主に3点の特徴が見られる。1点目は、1950年代には出版された教材が極めて少なく、3校いずれも主にガリ版で刷った教材を用いたことである。2点目は学生が自ら教材を編修し、または教材の編修に参加したことである。3点目は日本語専攻より一般教養の日本語教科書が先に出版されたことである。日本語の文献を読みたい知識人が増えたのである。

(2) 大連日語専科学校の設置過程、教員の採用と講習、学生の募集と進路、教材など全体的な様子について解明した。政治的な主導によって設置された大連日語専科学校が、中日交流を担う通訳人材を大量的に養成したことは、中日国交回復前の対中政策の縮図であるといえる。

(3) 戦前の日本への留学を通じて日本語を習得し、新中国最初の日本語・日本文学の教授となった徐祖正について研究を行った。徐は魯迅、周作人、郭沫若らと同じ官費日本留学生で、いわば20世紀初頭の中国のエリートであった。日ロ戦争以降の日本の飛躍的な発展を目にした彼らエリートは、中国と同じように従来の反封建的因襲や道徳に縛られた日本がどのように西洋文化を消化し、移り変わっていくのかに強い興味を示した。日本の文壇に影響を及ぼしたロマン主義文学や自然主義文学に傾倒したのは、その証左である。やがて近・現代中国の文壇や社会の主流となるプロレタリア思想の大波は、徐が芽生えさせた個の思想を呑み込み押し流した。徐は文学を経世の一手段とする左翼文学者の功利主義と距離を保つようになった。そうした徐の姿勢に対し、1930年代の受講生の1人であった呉組綱は、学術のために学術する「守旧的文学理論家である」と批判した。徐はもはや時代遅れであると世に捨てられた。徐が生きた時代において捨てられたその思想は、真の個の形成が望まれる今日の中国において鋭い光を放っている。功利主義が横行している現在の中国において、こうした徐の思想はもう一度吟味される必要がある。このように、徐の研究は、北京大学校史の研究にはもちろん、中国文学史、日本語教育史、さらに中国近・現代史の研究にも欠かせない作業である。

(4) 新中国における日本語教育の草分け的存在であった陳信徳についての研究である。旧植民地台湾に生まれた陳は、日本語を「国語」として身に付けたので、ネイティブな日本語が話せた。日本の敗戦によって「中国人」となった彼は、時代の要請によって北京大学日本語学科の日本語教師となった。日本との国交がない時代、日本語教育は行われていなかったかに思われがちであるがそうではない。陳のように台湾であるいは旧満州で日本語教育を受けた人々によって、ひっそりとしかし確実に行われていたのである。陳信徳は北京大学日本語学科の日本語教科書を地道な努力と熱意によって編集した。この陳の教科書の大きな特徴は文法の論理を重視することである。詳細な日本語文法を示した教科書がない時代、陳の教科書は日本語習得者の要望に応えるようなかたちで現れた。陳が編集した教科書は新中国における日本語教育に新たな系譜を作り上げ、新中国の日本語教育を支えていたことが明らかになった。

(5) 新中国の日本人教師、岡崎兼吉についての研究である。北京大学お雇い日本人教師としての岡崎の全容を、とりわけ教師としての岡崎、教材づくり、若手教師への指導、授業の担当という4つの側面から描き出した。岡崎は1953年5月、43歳の時に北京大学に就任した。文革の最中1969年12月に一時帰国を余儀なくさせられたが、1973年4月に北京大学の要請で再び赴任し、1988年9月79歳の誕生日を迎えるまで教壇に立ち続けた。在職年数は通算32年を超え、北京大学でもっとも長く日本語を教えていた「老専家」であった。彼が所属した部署では岡崎の人となりを「敬事愛人」（事を敬い、人を愛す）と称賛した。

(6) 大連日語専科学校の日本語教育を支援した日本共産党員教師団についての研究である。大連日語専科学校は1964年に開校した。1964年と1965年、のべ24名（家族を含む32名）の日本人教師を大連日語専科学校に派遣した。しかし、1966年に始まった文化大革命によって両党の関係が悪化し、派遣が中止された。こうして、大連日専における日本人教師の招聘はわずか2年で終わった。日本人教師の来華経緯や在華活動を中国の公文書や日本人教師側の回顧録を通してできる限り明らかにした。来華経緯をみれば、表向きは民間文化交流で、窓口として日本は日中友好協会、中国は対外文化聯絡委員会であったが、実際は日本共産党が主導した対中教育援助であった。中国側はこれら日本人教師を大歓迎した。出迎えから住居、食事や医療、買い物や見学、できる限りの態勢を整えようとした。日本語教育について、日本人教師は主に「会話」の授業を担当し、教育方法としては「聞く、話す」という直感教育を重視した。大量な公文書に反映されたように、日本人教師たちは授業に力を尽くしたことはもちろん、寝食を削って教材を作り、休日にも学生への日本語指導を行った。また、卒業生の感想文に述べられたように中国人教師との連携を図った。そうした教育に対する情熱は学校側に注目され、高い評価が受けられた。日本人教師に対して、中国側は高い待遇を与えた。高給はもちろん、夏休み中の慰安旅行、国慶節の式典や観閲式への招待参加および周総理主催の宴会の出席など精一杯の敬意を払った。この研究を通して、中日国交断絶期における両国のもう1つの交流のルートがあったことが浮かび上がった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計2件）

- ① 経志江（山本経天）、中日国交断絶期の日本語高等教育機関—建国初期の2校を対象として、中京女子大学研究紀要、査読有、第44号、2010、41-51。
- ② 経志江（山本経天）、中日国交断絶期における唯一の日本語・日本文学教授—徐祖正、日日経大論集、査読有、第42巻第1号、2012、23-44。
<https://jue.repo.nii.ac.jp/>

〔学会発表〕（計4件）

- ① 経志江（山本経天）、中日国交断絶期の日本語高等教育機関—建国初期の3校を対象として、日本教育学会第68回大会、2009、8、29、東京大学駒場キャンパス。
- ② 経志江（山本経天）、岡崎兼吉—新中国北京大学の日本語教育とともに歩んだ『老専家』、第2回東アジア教師教育研究国際大会、2010、12、16、中国、香港教育学院。
- ③ 経志江（山本経天）、中日国交断絶期における唯一の日本文学教授—徐祖正、教育史学会第55回大会、2011、10、2、京都大学文学部新館。
- ④ 経志江（山本経天）、陳信徳—中日国交断絶期北京大学の日本語教師、第3回東アジア教師教育研究国際大会、2012年12月8日、中国上海・華東師範大学。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

山本 経天 (YAMAMOTO KEITEN)
日本経済大学・経済学部・准教授
研究者番号：40410641

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし